

## 第二章 富士山本宮浅間大社の祭礼

## 第一節 浅間大神からコノハナサクヤヒメへ

## 富士山と浅間大神

富士宮市には、全国の浅間神社の総本宮とされる富士山本宮浅間大社（以下、浅間大社）が祀られている。それでは、浅間神社は全国に何社くらい祀られているのであろうか。『浅間神社の歴史』には、昭和初期の全国に分布する浅間神社数が示されている（図2-1・表2-1）。ただし、この統計は国家が神社を直接管理した時代のもので、明治四年（一八七二）に官国幣社の制度が定められてから、昭和二〇年（一九四五）に連合国軍により廃されるまでの期間限定の数量である。

同書によれば、浅間神社の分布は北海道から長崎県までほぼ全国に及び、官幣大社から境内社まで含めると一三一六社を数える。浅間神社の祭神は「木花之佐久夜毘売命」であり、この祭神を祀る神社には「富士社・富士権現、及び其他の社号を称するものはカナリ沢山ある」とし、ここでは浅間神社の社号を持つものに限定して集計している。総本宮のお膝元である静岡県の浅間神社は一五〇社と他県に抜きん出ているが、千葉県に二五七社、埼玉県に一八五社、栃木県に一七九社、茨城県に一〇九社と関東地方も圧倒的な数を占めている。これは、富士山に祀られている浅間神社の御霊を各地に分霊して祀るようになったためで、特に江戸時代に隆盛した長谷川角行を開祖とする江戸の富士講の影響によるものと考えられている（宮地 一九一九）。

浅間大社の「富士山本宮浅間社記」によれば、第七代孝靈天皇の代に富士山の噴火が起こり、第二代垂仁天皇二年（紀元前二七年）に浅間大神を山足の地に祀って山霊を鎮めたとある。浅間大社では、これを当社の起源としている。第一二代景行天皇四〇年（一一〇）には日本武尊が浅間大神を山宮（現山宮浅間神社社地）に遷し、第一代平城天皇の大同元年（八〇六）に坂上田村麻呂が現在の大宮の地に遷して壮大な社殿を設営したという。浅間大社の社地には、古くから地主神として富知神社が祀られ、浅間大社の遷宮にあたって立宿（現朝日町）に遷されたという。

現在、浅間大社が鎮座している大宮の地には富士山の豊かな湧水の一つ、湧玉池がある。富士山の噴火を鎮めるために、湧水地を選んで浅間大社が祀られたとすれば、当地は最適な場所であったと考えられる。富士山は、記録に残るだけでも天応元年（七八一）、延暦一九年（八〇〇）、貞観六年（八六四）などと、奈良時代から平安時代にかけてたびたび大きな噴火を繰り返してきた。そのたびに国家をあげて鎮火の祈禱を繰り返したことから、浅間大社は仁寿三年（八五三）に名神に列せられ、『延喜式神名帳』では名神大社に上げられた。名神とは、名神祭の際に奉幣にあずかる特に靈験の優れた神社のことで、国ごとに称された一宮になることが多い。浅間大社は駿河国の一宮でもある。

日本武尊が遷したとされる山宮浅間神社には、通常神社にあるよ

都道府県	神社数	都道府県	神社数
北海道	2	岐阜県	15
岩手県	1	静岡県	150
宮城県	1	愛知県	58
秋田県	1	三重県	25
山形県	1	滋賀県	1
福島県	9	京都府	2
茨城県	109	兵庫県	1
栃木県	179	奈良県	3
群馬県	80	島根県	1
埼玉県	185	広島県	1
千葉県	257	高知県	1
東京都	60	福岡県	8
神奈川県	33	大分県	1
山梨県	66	佐賀県	3
長野県	57	長崎県	2
新潟県	3	<b>合計</b>	<b>1316</b>

表 2-1 昭和初期の全国に分布する浅間神社数

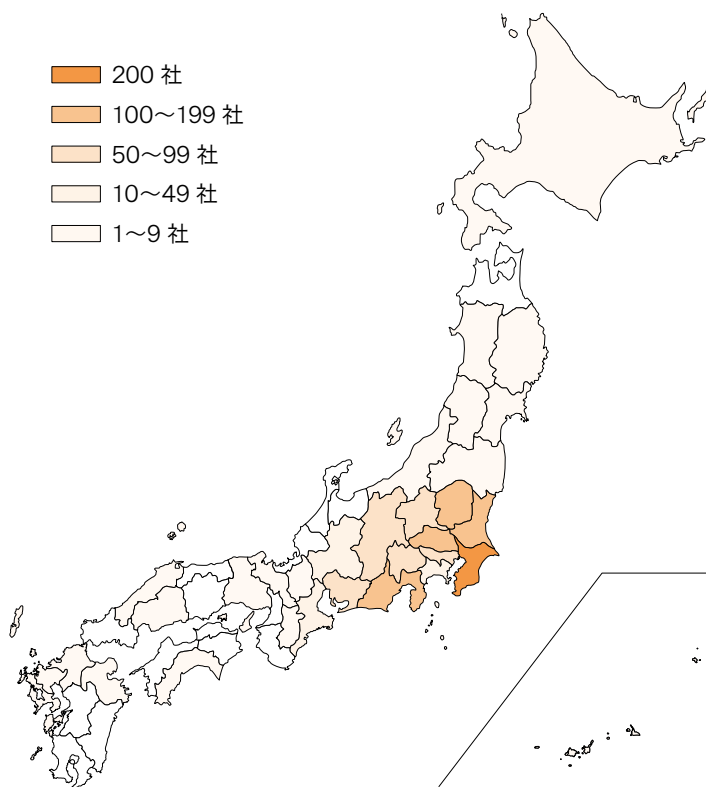


図 2-1 浅間神社分布一覧

うな本殿はない。植林地でやや視界は狭くなっているが、正面に富士山を仰望できる高台があるのみである。日本人の山岳信仰には、古くから山体そのものを御神体とみなして遙拝する人たちがあつた。前述した日本武尊が山宮に浅間大神を祀つたとされているのは、この地から富士山を仰ぎ見て拝むことができる場所であつたからであらう。当時の富士山は盛んに噴煙を上げていた畏怖の対象であり、山宮はそれを鎮めるための重要な祭祀地であつたといえる。

### 火の神から安産の神へ

富士山は火を噴き噴煙を上げる山であり、山そのものが火の神の御神体であつた。浅間大神はアサマノオオカミと読み、噴火する山の神を意味している。浅間大神が山宮から大宮へ遷されたことされる理由は、前述した湧玉池の水によって富士山の鎮火を願つたからである。そこに、浅間大神の祭神を木花之佐久夜毘売にしたこと、この祭神に対し「水徳の神」として火災を消滅する信仰が生まれた。木花之佐久夜毘売は大山祇神の娘で、天孫瓊瓊杵尊の妃となつた。一夜で懐妊したことを夫から疑われ、身の潔白を証すために、土で塗り込めた洞に入り、外から火を放たせて出産に臨んだ。炎の中で無事三人の子どもを出産したことにより、木花之佐久夜毘売は安産の神として祀られるようになる。このことから、鎮火の神が火中に出産した神となり、火を制する水の神の靈威に、安産の神としての信仰が加わつたのである。

現在、浅間大社では主祭神は木花之佐久夜毘売、別称浅間大神で、家庭円満・安産・子安・水徳の神とし、「火難消除・安産・航海・漁業・農業・機織等の守護神」としての御利益があるとされている。

なお、祭神名の表記を「木花之佐久夜毘売」とするのは『古事記』、「木花開耶姫」とするのは『日本書紀』によっている。

## 第二節 伝統ある祭礼と現在の祭典

### 富士山本宮浅間大社の祭事曆

令和七年（二〇二五）現在、富士山本宮浅間大社（以下、浅間大社）では年間一五九度におよぶ恒例祭典が行われているが、その主要な祭事をあげると表2-2のようになっている。この表の中でも、江戸時代から続いているのが初申祭・流鏝馬祭・御田植祭である。浅間大社は、富士山を祀る神社であると同時に、駿河国の一宮、そして大宮町の氏神でもある。氏子地域は旧大宮町を中心に広範囲にわたっており、氏子の信仰は今日でも篤い。現在の祭事は、五月の流鏝馬祭と十一月の例祭の二度あり、このうち多くの氏子が参加するのが十一月の例祭である。例祭には、氏子が付祭として「富士宮まつり」を催し、山車・屋台を繰り出し、そこで富士宮囃子を演奏する。富士宮まつりについては第三章で詳述する。ここでは、そのほかの祭礼について概略を述べる。

まず、富士山に関わる祭礼は、七月の本宮（浅間大社のこと）開山祭・奥宮開山祭、八月下旬の奥宮閉山祭、九月の閉山祭である。また、四月には富士山を遥拝する山宮浅間神社に浅間大社の神が渡る初申祭が行われる。江戸時代の初申祭は、卯月（四月）と霜月（十一月）の最初の申の日に行う大祭であった。

一方、鎮守としての浅間大社には、農耕儀礼と深く関わりを持つ祭礼がある。それが、五月の流鏝馬祭と七月の御田植祭である。さらに半年に一度、身の穢れを祓う六月の夏越大祓式と一二月の師走大祓式も、氏子が清め祓えをする重要な行事である。また、明治政府の神社神道の国教化政策以降、新たに加えられた歳旦祭・節分祭・祈年祭・神嘗祭・七五三祝祭・新嘗祭などの祭りも、全国の神社と同様にある（写真2-1～2-4）。これらの祭日には、晴着を着た

月日	大祭	中祭	小祭	摂末社祭典	諸祭典と式典
1月1日		歳旦祭	氏子安全祈願祭	摂末社歳旦祭	
1月3日		元始祭			
1月4日				水屋神社例祭	
立春前日			節分祭		
2月初午				末社稲荷神社例祭	
2月11日		紀元祭			
2月23日		天長祭			
3月17日		祈年祭			
4月1日			桜花祭		
4月4日				末社天神社例祭	
4月初申			初申祭		山宮浅間神社初申祭
4月29日		昭和祭			
5月4日			流鏝馬前日祭		川原祓
5月5日	流鏝馬祭			末社流鏝馬祭	
5月6日			流鏝馬後日際		
6月17日				巖島神社例祭	
6月最終日		御田植祭			神田宮御田植祭
6月30日					夏越大祓式
7月10日			開山祭		
7月11日					奥宮開山祭
8月15日					奥宮例祭
8月下旬					奥宮閉山祭
9月11日			閉山祭		
9月26日				富士大宮司家墓前祭	
10月17日		神宮神嘗祭祝祭		神宮遥拜式	
11月3日			例祭前日祭		
11月4日	例祭				
11月5日			例祭後日祭		
11月15日			七五三祝祭		
11月23日		新嘗祭			
12月31日			除夜祭		師走大祓式

表2-2 富士山本宮浅間大社の主要な祭事（浅間大社提供の一覧を一部加工）



写真 2-3 開山祭



写真 2-1 夏越大祓式の茅の輪



写真 2-4 新嘗祭で奉納された農作物



写真 2-2 茅の輪くぐり



図 2-2 境内図 (浅間大社 提供を加工)

市内外からの参拝者が拝殿前に長蛇の列を作る。

浅間大社には多くの摂社、末社が祀られている。大社境内にあるのは、水屋神社・天神社・稻荷神社・巖島神社の四社であるが、かつては境外地にも多くの末社が祀られていた。中には古くから流鏝馬祭と関わりを持つ浅間神社もある。現在も浅間大社の流鏝馬祭の前に、米之宮浅間神社（富士市本市場）と富知六所浅間神社（富士市浅間本町）の祭礼に浅間大社の神職が参列するのは、そのような由緒からである。

### 江戸時代に行われていた初申祭と山宮御幸

富士山の山麓とその周辺に祀られている浅間神社には、四月と一月の例祭に本社（里宮）から山中の神社（山宮）へと神が巡行するものがある。これを山宮御幸などといい、例えば静岡浅間神社（静岡市葵区）の廿日会祭でも四月二日を昇祭、同三日を降祭として、浅間神社の神が賤機山の麓山神社を行き来する。浅間大社のこととを本宮といい、静岡の浅間神社のことを新宮と呼び分けているが、新宮ではこれを祭神の木之花咲耶姫命が父神の大山祇命に会いに行くのだと説明している。近世の記録や地誌には、この祭礼を大祭礼とし、宮司は精進潔斎をしてお籠りをしたと記されている。

「富士本宮年中祭礼之次第」（慶安三年（一六五〇））には、祭礼前に神社から市神まで柴を挿して結界を作り、卯月初申（四月最初の申の日）より七日前の寅の日に惣社家中（すべての社家）が浜下りをし、あち神に参詣するとある。浜下りとは禊ぎのことで、海浜や川辺に出て水で身の罪や穢れを洗い清めることである。あち神は阿字神のことで、現在、富士市田子の浦の鈴川に祀られている阿字神社をさしていると考えられる。祭りのために清浄な祭場を用意し、はるか田子の浦の浜まで行って禊ぎをしなければ、初申の祭りを行

うことができなかつた。そして、未の日未の時刻（午後一時～二時）に山宮へと神幸する。本殿より御銚を左肩に担いで渡り、休憩は六カ所と決まっていた。山宮での神事後、宮司以下神職たちは山宮に籠り、丑の刻（午前二時前後の二時間）に山宮を出発し御銚が還幸する。翌上申の日（四月上旬の申の日）が大祭礼で、楼門前で神事・儀礼が執り行われ、大宮司のほか神職が本殿の内陣に入り銚を納めるという。

今日このような厳粛な祭礼は行われていないが、平成一八年（二〇〇六）、浅間大社鎮座二二〇〇年の奉祝として山宮御神幸（初申祭・御神幸）が復興し、銚を担いで山宮浅間神社に巡行するようになり現在に至っている（写真2-15～8・図2-13）。浅間大社楼門前と山宮浅間神社参道には、銚立石と呼ばれる台石が残されている（写真2-19）。かつて、この石の上に銚を立てたとされる。銚は浅間大神の依代であり、御神体そのものとして扱われ、不浄な地面に直接立てることを忌んだのであろう。

ところで、なぜ山宮御幸に銚を担いで渡るのであろうか。山宮御幸の銚は、武器ではなく祭具として重要な意味をもつ。最も古く有名な銚は祇園御霊会の銚である。京都祇園祭の山銚巡行は、疫病退散を願って六六本の矛（銚）に国中の神霊を集めたことに由来する。浅間大社の銚は、遙拝所である山宮で富士山の神霊を招くために使用されたのではないだろうか。半年に一度、浅間大神の御霊の再生を行うための重要な儀礼が四月と一月の初申祭だと考えられ、富士山を祀るほかの浅間神社でも浅間大社と同じような祭礼が行われてきたのである。



## 第三節 富士山本宮浅間大社の流鏝馬

## 五月会流鏝馬神事

例年、五月四日から六日にかけて富士山本宮浅間大社（以下、浅間大社）では流鏝馬祭が行われる。流鏝馬とは、馬に乗って走りながら的に向かって矢を射る弓技のことである。流鏝馬では鏝矢といい、音響を発する装置をつけた鏝を用い、三つの的を順次射る。「矢馳馬」が転じて「やぶさめ」となったともいわれ、鏝矢を用いることから流鏝の文字をあてたと考えられている。古くは平安時代、滝口武士（宮中の警備にあたった武士）が鳥羽の離宮で行った記録があり、やがて鎌倉時代になると幕府の行事として取り入れられ、放生会などに盛んに奉納された。源頼朝は関東の流鏝馬の様式を整備して基を調え、綾蘭笠・狩衣・水干・直垂に行膝・射籠手を着け、箆を負った狩装束を例とした。江戸時代、八代将軍徳川吉宗はこの鎌倉の旧儀を再興し、現在もその伝統が小笠原流に引き継がれている（鈴木 一九九三）。

現在行われている浅間大社の流鏝馬は、古式流鏝馬（富士宮市指定無形民俗文化財、写真2-10）と神事流鏝馬の二部構成になっている。大宮の地で伝統的に継承されてきた流鏝馬を古式流鏝馬と命名し、一時期衰退した折りに取り込まれた小笠原流流鏝馬を神事流鏝馬として、午前と午後の行事に分けて行っている。小笠原流流鏝馬は、戦後に農耕馬の調達が困難となり、さらに騎乗者不足によって、昭和二九年（一九五四）から始められたもので、現在の神事流鏝馬では頼朝が調べたという鎌倉の系統を引く武家の勇ましい流鏝馬を見ることができ（写真2-11）。

大正七年（一九一八）九月の「官幣大社浅間神社特別神事」には、建久四年（一一九三）源頼朝が富士の裾野で巻狩りをした際、神前

に流鏝馬の式を奉納したと記されており、浅間大社の流鏝馬はこれが由来譚となっている。しかし、富士の巻狩りは史実としても、その後の説話文学などの影響もあり、市内各地には多くの頼朝伝説が残っている。そのうちの一つが頼朝の流鏝馬奉納であると考えられている（富士宮市教育委員会 二〇〇七）。

それでは、小笠原流とは異なる従来の浅間大社の流鏝馬はどのように行われてきたのであろう。流鏝馬が歴史資料に現れるのは、天正元年（一五七三）の武田勝頼の流鏝馬銭寄進状からである。天正一八年（一五九〇）の豊臣秀吉朱印状写には、富士浅間本宮の流鏝馬領は、上方流鏝馬四騎・下方流鏝馬五騎・加島流鏝馬五騎・矢流鏝童子に合計一六〇石余あることが記されている。流鏝馬を執行するために上方（現富士宮市）から四騎、下方（現富士市内のほぼ潤井川より東）から五騎、加島（現富士市内のほぼ潤井川から西）から五騎のほか、矢鏝馬童子を調達するため、領地が寄進されていたことがわかる。

江戸時代、流鏝馬は浅間大社の五月会で行われていた。「富士本宮年中祭礼之次第」（慶安三年（一六五〇））には、四月末日に始まる上方五騎の浜下りから五日の本宮の流鏝馬（上方五騎・下方五騎・加島五騎）までが詳細に記されている。同様に、明治五年（一八七二）の「古来所伝祭式」にある「五月会流鏝馬神事」の日程は表2-13のようになっている（浅間神社社務所 一九三二）。

明治維新によって浅間大社は流鏝馬領を政府に上納し、大社の資金は社領地からの扶持米をあてることとなった。流鏝馬にかかる資金が不足するようになったため流鏝馬は一時中断していたが、明治六年（一八七三）六月五日には再興したという。この後、第二次世



写真 2-11 神事流鏝馬（小笠原流鏝馬）



写真 2-10 古式流鏝馬（本乗り）

界大戦中と戦後の混乱期に中止された時期はあるものの、流鏝馬を奉仕する馬は、市内はもとより富士市や山梨県南巨摩郡からもやってきて、祭りが続けられてきた（富士宮市教育委員会 二〇〇七）。

月 日	行 事 内 容	備 考
4月初申日	甘葛大夫より甘葛4箇（荷）納む	1本宮、2山宮、3福知、4若宮に用う
4月29日(大) ・28日(小)	上方五騎潔	鈴川海浜（下方五騎・加島五騎は各その地方において潔斎）
5月2日	矢根12本・火打1個、的釘30本、鍛冶職より出す	
	末社米之宮にて流鏝馬	加島五騎
5月3日	末社若宮八幡宮および若之宮にて流鏝馬	上方射手2人執行
	六所浅間神社にて流鏝馬	下方五騎
5月4日	末社山宮・金之宮・福知神社にて流鏝馬	上方射手
	同日、本宮馬場にて埒を結う	長65間、6尺・5寸杖
	晩方、カムナガケを執行	杉田・中里・森之腰の3騎 的は1騎3枚ずつ
5月5日	早旦、神前に菖蒲飾る・御煎（甘葛）献る・葛葉と菖蒲帯を給う・御煎を給う	
	流鏝馬	上方五騎・下方五騎・加島五騎
	一ツ物	御子武羅・大名・京上臈・鼓師渡る
	射手附次第書を示す	関伽井坊・下方加島射手→射手代官拜見
	騎馬を改む	馬の髪・頭・長一束三伏、鞍具、乗手装束等进行检查す
	馬場見せ15騎	乗手水干・射笠・行膝・馬障泥をつけず
	問行事所にて上状を検ず	関伽井坊・宮仕・小見職
上げ馬15騎	大房鞆を付く、障泥なし、 乗手武羅・征矢・行膝・水干・太刀・靴・ 射笠・綾蘭笠・脛巾	

表 2-3 「古来所伝祭式」にみる五月会流鏝馬神事

## 農耕馬が駆けた流鏑馬祭

現在行われている流鏑馬祭は、大正七年九月に浅間大社が調査し内務省に提出した「官幣大社浅間神社特別神事」の「流鏑馬祭」に則<sup>したが</sup>って再現されている。表2-4は、現在の流鏑馬祭の日程と概略を一覧にしたものである(図2-4)。表2-3の明治五年の「古来所伝祭式」と比べると、順番の前後はあるもののほぼ同じような行事内容となっている。しかし、表2-4に「行い」と記載されているものが表2-3には見えない。「行い」が江戸時代には実際に行われていなかったのか、あるいは記載されなかったのかは不明である。ただし、この「行い」は楼門前<sup>ろうもん</sup>で騎乗したまま天地四方を射る所作をし、的場の魔を除け祓<sup>はら</sup>い清める重要な作法であり、これが富士宮市指定文化財の主要な内容を占めている。いわゆる馬を走らせながら的を射る流鏑馬とは異なる、神事のような作法が流鏑馬祭に取り込まれているのである。

また浅間大社の流鏑馬では、かつて「願乗<sup>がりのま</sup>賽乗」と呼ばれた馬駆けが行われた。願乗とは射手参拝者の祈願のために、賽乗とは射手参拝者の報賽<sup>ほうさい</sup>、つまり願掛けのお礼参りのために行ったものである。流鏑馬本来の式とは異なるが、江戸時代に群集が押し寄せた祭りの一端に、このような信仰的な馬駆けがあったことがわかる。大正七年の「官幣大社浅間神社特別神事」の起源の項には、次のように記されている。

往古ヨリ馬匹一度境内地ヲ踏メバ必ず病ム事ナシト言ヒ  
伝へ、祭日ニ当リテハ地方ノ馬匹祈願ノ為メニ境内ニ集  
合シテ、流鏑馬ノ間馬場ニ競馬ヲ行ヒテ盛観ヲ添フルガ  
故ニ、参拝者遠近ヨリ群集シテ町内立錐<sup>りっすい</sup>ノ地ナク、当社  
ノ祭典中最モ殷賑<sup>いんしん</sup>ヲ極ムルモノトス

因二記ス、当社鎮座地富士郡が往古ヨリ馬ノ名産地トシ  
テ知ラレ、今猶<sup>なほ</sup>地方民ガ何レモ馬ニ関スル特殊ノ知識ト  
趣味トヲ有シテ駿馬<sup>しゅんま</sup>ヲ飼育スルハ、コレ当社流鏑馬神事  
ノ影響ニヨレルモノ多キガ如シ

武家のたしなみとして始まった浅間大社の流鏑馬は、江戸時代初期以降、近隣の農耕・運搬用の馬を調達して行われるようになった。流鏑馬祭の最中には馬場で競馬も行われ、参拝者は遠方からも押し寄せて身動きできないほどにぎわった。富士郡は馬の名産地としても名高く駿馬を飼育できたのは、この流鏑馬神事の影響が大きかったという。「飼い馬を流鏑馬に出走させると怪我をせず丈夫になり、農作業が円滑に進む」といわれ、農耕用の馬を連れて参加する氏子<sup>うじこ</sup>に支えられていたのである(富士宮市教育委員会 二〇〇七)。祖父の代から流鏑馬に参加している佐野孝男氏(昭和二五年生)の家では、孝男氏の父が一年に一回農耕馬を連れて浅間様に参拝するのを楽しみにし誇りにもしていた。父が大社から頼まれて近隣の馬を九〇頭そろえ、流鏑馬祭の後の練行<sup>れんぎょう</sup>で市内を巡行した時は壮観であったという。明治維新や第二次世界大戦による中断はあっても祭りは続けられてきたが、機械化が進み農耕馬を飼育しなくなり騎乗者も足りなくなった。そのため、昭和二九年からは神事流鏑馬として小笠原流による流鏑馬を行うようになった。しかし、伝統的な浅間大社の流鏑馬は途絶えてしまう。そこで、平成一七年(二〇〇五)に浅間大社流鏑馬祭保存会を結成し、浅間大社の古式流鏑馬として、御子乗り・馬場入り・馬改め・射手次第書・馬場見せ・上状<sup>あてじょう</sup>および問・行い・本乗りまでの一連の行事を保存・継承することとした。保存会は、伝承者の技能の熟達、後継者の育成や奨励などのために活動を続けている。令和七年(二〇二五)現在、顧問以下二七人の会員からな

月 日	行事内容	場 所	備 考
5月2日			
10:00	米之宮浅間神社例祭 参列	富士市本市場	
5月3日			
10:00	富知六所浅間神社例 祭参列	富士市浅間本町	
5月4日			
9:30	川原祓・水神社参拝	富士市松岡	神職・射手・浅間大社役員・水神社役員
10:30	馬場祓	浅間大社馬場	神職2人騎馬にて馬場を祓う
11:00	流鏝馬前日祭	浅間大社社殿	神職・射手・大社役員
13:00	末社巡拝	若宮八幡宮（小泉） 金之宮（淀師） 富知神社（朝日町）	神職・射手・大社役員・各末社役員
13:00	流鏝馬習礼（かんな かけの儀）・祭場舗設	浅間大社馬場ほか	
5月5日			
9:00	流鏝馬祭	浅間大社社殿	弓矢授与後、正射手以外退出
9:45	御子乗り	浅間大社馬場	御子騎馬にて馬場元から馬場末まで進む
10:00	流鏝馬式	浅間大社楼門前・ 馬場	馬場入り…射手騎馬にて列を作り中央へ集まる
			馬改め…馬改め役が5騎の馬、射手、馬具を 検分する
			射手次第書…神職が読み上げる
			馬場見せ…射手5騎馳せる（略）
			上状および問の行事…神職と射手代官の問答
			行い…射手1騎が天・地・四方を祓う
			本乗り…射手5騎、一の的を射て馳せる
正午	練行出発	西鳥居	浅間大社→市役所駐車場→浅間大社
15:00	神事流鏝馬式	馬場	小笠原流流鏝馬
5月6日			
11:00	流鏝馬後日祭	浅間大社社殿	神職・射手・大社役員

表 2-4 浅間大社流鏝馬祭の日程（令和7年）

り、三月からは毎週日曜日に白糸牧場で練習を重ねている。保存会  
員は馬に乗れることが最低条件としている。浅間大社の流鏝馬祭は、  
コロナ禍で中断したり縮小したりしたものの、現在でも多くの市民や  
近隣の人々が楽しみにしている祭りの一つとなっている（写真2-12）  
19）。

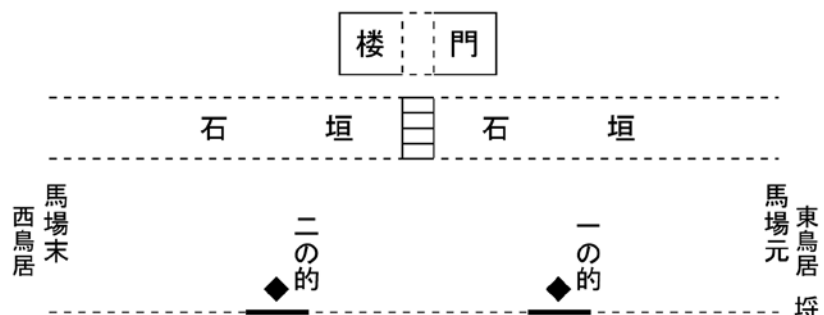


図 2-4 浅間大社流鏝馬馬場の図  
（『富士山本宮浅間大社流鏝馬調査  
報告書』）



写真 2-16 馬改め



写真 2-12 川原祓い (富士市松岡の水神社)



写真 2-17 射手次第書



写真 2-13 馬場祓い



写真 2-18 行い



写真 2-14 末社巡拝 (金之宮)  
かんのみや



写真 2-19 特殊神饌 (左から甘葛・苺蒲・蓬・茅卷)  
しんせん あまづら しょうぶ よもぎ ちまき



写真 2-15 御子乗り

## 流鏑馬祭の甘葛と菖蒲挿し

流鏑馬祭の神事では特別の神饌しんせんが供えられ、奉仕者が直会なおらいでそれをいただく。これを甘葛あまづらといい、甘葛煎あまづらせんの略称である。砂糖がなかった時代、甘葛はブドウ科のツタ性植物（アマチャヅルなどほかの植物という説もある）の樹液を煮詰めた甘味料として使われていた。平安時代の『枕草子』には、削り氷に入れて食べたとあり、現在のかき氷のような食べ方をしたようである。甘葛はまた、薫香を練る際に蜜の代わりに用いられたという（篠田一九七九）。さらに、「甘葛の使い」といい、甘葛を運送するために中央から派遣された使いがあったともいう。

このように甘葛は、室町時代以降に砂糖が普及する以前の貴重な甘味料であった。その甘葛は、浅間大社の流鏑馬神事では毎年甘葛太夫だゆうが調製し奉納するものであった。現在でも甘葛太夫は深澤家の世襲で、毎年欠かさず奉納している。この甘葛の製法は深



写真 2-20 檜の葉でいただく甘葛

澤家の秘伝であり、神事終了後は奉仕者が甘葛を檜かじの葉にうけていただく。なお江戸時代は、卯月初申うづきはつさる（四月初申）に甘葛太夫が甘葛四箇よんかを奉納し、五月三日の若宮、同四日の山宮・福地、端午（同五日）の本宮の神事において、御煎みせんを柄杓ひしやくの酌しやくでいただいたという（浅間神社社務所一九三一）。甘葛太夫は刈り取った甘葛四箇（荷か）を四月の初申祭で奉納し、それを煎じたもの

は五月の流鏑馬祭の一連の行事でいただいたようである（写真2-20）。

流鏑馬祭では、甘葛のほかにも重要な植物が登場する。境内の社殿や門、玄関などの建物の軒に挿されている菖蒲あやむすと蓬よもぎである。非常に大量である上に、神職や古式流鏑馬の射手、神事流鏑馬の射手など、神事に関わる人たちの奥襟おくぼりにも菖蒲が挿される。江戸時代も同様で、端午前日の四日に菖蒲と蓬で屋根を葺ふくとある（浅間神社社務所 一九三一）。また、大正七年の「官幣大社浅間神社特別神事」にも、前日の五月四日早朝に「菖蒲・蓬ヲ用テ神殿・社務所・楼門ノ家屋葺ヲ行フ」とあり、神事終了後に菖蒲と蓬は各自帯に差し挟む。同様に、五月五日日本祭でも、神前よりおろした菖蒲と蓬が神職と射手以下奉仕者に分けられ、各自帯に差し挟むとある。現在は帯ではなく奥襟に挿しているが、なぜ流鏑馬祭ではこのように菖蒲と蓬を挿するのであろうか。

一般的に、菖蒲といえばアヤメ科のハナシヨウブを思い浮かべる人が多い。しかし、端午の節供に見られる菖蒲はサトイモ科（APG分類ではシヨウブ科）の水辺に生える植物のことである。植物全体に芳香があり、葉先が鋭く尖とがつて剣のような形をしている。蓬も強い香りを持ち、菖蒲と共に薬用としても知られていた。古くから端午は悪月だとされ、邪気を払うために菖蒲と蓬を御殿や市民家の屋根や軒に挿す習慣があり、「菖蒲の節供」などともいった。現在でも菖蒲と蓬を入れた菖蒲湯に入って疫病退散を願う家も多い。浅間大社の神事で神職と射手達が菖蒲と蓬を挿すのは、これとは別に騎射儀礼の際に天皇・群臣ともに菖蒲鬘あやむすかむらを頭にかける風習があったことに由来すると考えられている。菖蒲の音から尚武しやうぶを連想し、今日の端午の節供が男児の節供になったのである。

## 第四節 御田植祭の変遷

### 大宮町民に支えられてきた御田植祭

富士山本宮浅間大社（以下、浅間大社）の御田植祭は、大祭に次ぐ重要な祭礼である。「富士本宮年中祭礼之次第」（慶安三年（一六五〇））に詳細な記録があるが、明治初年に明治政府に境内以外の領地を返納したため、祭礼資金が不足して流鏝馬と同様に中絶し、その後さまざまな変遷があつて今日の御田植祭となっている。

明治初年の中絶後、明治四年（一八七二）には本殿の神事のみで御田植祭が復活した。しかし、このときは神田での御田植式が行われなかった。また、祭日も明治二年（一八七八）まで六月二八日であつたが、翌一二年から新暦によって七月七日と定められ今日に至っている。現在のように、神田での御田植式が再興されたのは明治三二年（一八八九）のことである。本来、神田は大宮町字神田橋南裏にあつた。昭和五年（一九三〇）の『大宮町誌』には、齋田（神田）についての変遷が次のように記されている。

齋田は、しばらく使われていなかったため所在さえわからなくなつていたが、再興の際にはその路傍付近の四尺大の井形窪地を充てていた。明治三四年（一九〇一）三月に南裏新道開鑿の計画が起り、齋場（齋田）を道路が横断することとなつた。そのため、その代替地として齋場西側二三歩（約七六m）の土地を大宮町が買って浅間大社に寄進した。大正八年（一九一九）には、付近の町民有志が寄付を出し合つて齋殿を新造した。この齋殿が、現在の神田宮の神殿である。

明治二二年に御田植式が再興された際の浅間大社の記録によれば、神田は「穰田」と記されている（鈴木 二〇一六）。まだ現在の神殿がなかった時代、「穰田神事之図」には神座に神を招いて神

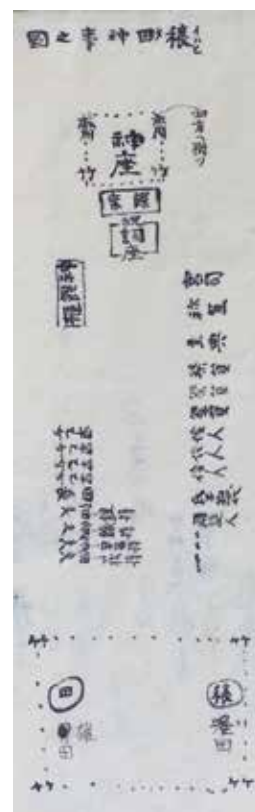


図 2-5 穰田神事之図  
(浅間大社蔵)

事を行う様子が描かれ、宮司などの神職と向き合つて、早乙女四人・田長一人・佃夫四人が参列している。佃夫は鋤持・鍬持・早苗持・萩持と、それぞれ所持する物も示されている（図2-5）。

なお、明治二八年（一八九五）七月七日からは、富士山の開山時期に合わせて浅間大神へ開山中の擁護を祈るための開山祭が行われるようになった。それまでは、七月一日に開山祭が行われるのが例であつたという（宮地 一九二九）。

### 令和五年の御田植祭

現在の御田植祭は、大正七年（一九一八）九月に調査し報告された浅間大社特別神事「御田植祭」の記述にほぼならつて行われている。七月六日に神田宮宵宮祭、七日に本宮祭典の後、一同が行列を組む神田宮に移動して神田宮祭典となる。しかし、今日の最も華やかな少女たちの早乙女舞「田植舞」は、大正八年の記録には記載されていない。これは、昭和四年（一九二九）に当時の宮司が熱田神宮の御田植祭の唄と舞を、浅間大社に取り入れたことから始まつたものである。熱田神宮の舞は、春日大社の社司富田家に伝わる舞を伝授したものだという（繁原 一九九七）。

令和五年（二〇二三）現在、早乙女は一八人であつた。このう

ち歌姫五人が小学五年女子児童、舞姫一三人が小学六年女子児童で、市内の小学校から選出されている。かつて、早乙女は地元神田区では「お稚児さん」と呼ばれ大宮町内から選ばれていたが、歌姫五人はいつの頃からか神田区の小学五年生が優先的に推薦されたという。華やかなお稚児さんは女の子の憧れであった（神田区二〇〇〇）。

神田宮での御田植式では、神事の後、田長が田植唄「あさまのたろじは良いたろじ、植え田の中でも良いたろじ良いたろじ」とうたい、早乙女が田植舞をうたい舞う。田長の田植唄は古くから歌い継がれていたものだが、文言が短く詳細はわからないという。

その後、田代役の青年三人が青萩・鋤・鍬を持って田の中に入り、代掻きの所作をしながら萩の若枝を敷き込む。次に、田長が早苗を神職や早乙女、参列者達に配ると、人々は一斉に田に苗を投げ入れる。この苗は後に、神田の管理者が整えて田植を終えておく。神田宮での一連の行事が終ると、一同は浅間大社に戻り、再び田長の歌、早乙女の田植舞が奉納され、神職や早乙女達が拝殿廻廊から早苗をまく。

この祭りには地方の人々が多く集まり、神田の余り苗を争ってもらい受け、自分の田に植えて豊穰を願った。昭和一六年（一九四二）の『官国幣社特殊神事調二二』にも、「参拝ノ群集此苗ヲ拾ハントシテ田ニ下リテ揉ミ合ヒツ、喧噪スル様甚ダヲカシ 是レ古来ヨリノ信仰ニヨルコトナリ」とあり、神田の苗が五穀豊穰をもたらすという信仰が古くからあったことがわかる。御田植祭の再興は、大宮周辺の農民の切実な願いだったのである。昭和二〇年代まで、御田植祭までに田植えを済ませ、「農休み」といって手伝いの人を招待し御馳走したものだという（神田区 二〇〇〇）。

またこの日、神田通りから神田宮までの参道には露店が出てにぎ

わったという。『大宮町誌』には、「此日神田町に商市を開らし、神田の市と唱へ、地方に罕なる殷賑なりし」とあり、六斎市にちなむ神田の市もこの当時は御田植祭にちなんだ市であったことが記されている。なお、令和七年（二〇二五）から御田植祭は六月最終日曜日に行われることとなった。近年では、祭礼に関わる人たちの仕事や学校の休日に合わせることも多くなってきたのである。



写真 2-23 田長の田植歌



写真 2-21 早乙女の田植舞



写真 2-24 浅間大社での早苗投げ



写真 2-22 田代役の萩・鋤・鍬